

Title	古版経済書解題 ジョン・ラムジイ・マカラックの一千八百二十四年版『経済学の発生、進歩、特殊目的及び重要性』並びに一千八百二十五年版『経済原論』
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.8 (1936. 8) ,p.1237(145)- 1258(166)
JaLC DOI	10.14991/001.19360801-0145
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360801-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古版經濟書解題

ジョン・ラムジイ・マカラックの一千八百二十四年版『經濟學の發生、進歩、特殊目的及び重要性』並びに一千八百二十五年版『經濟原論』

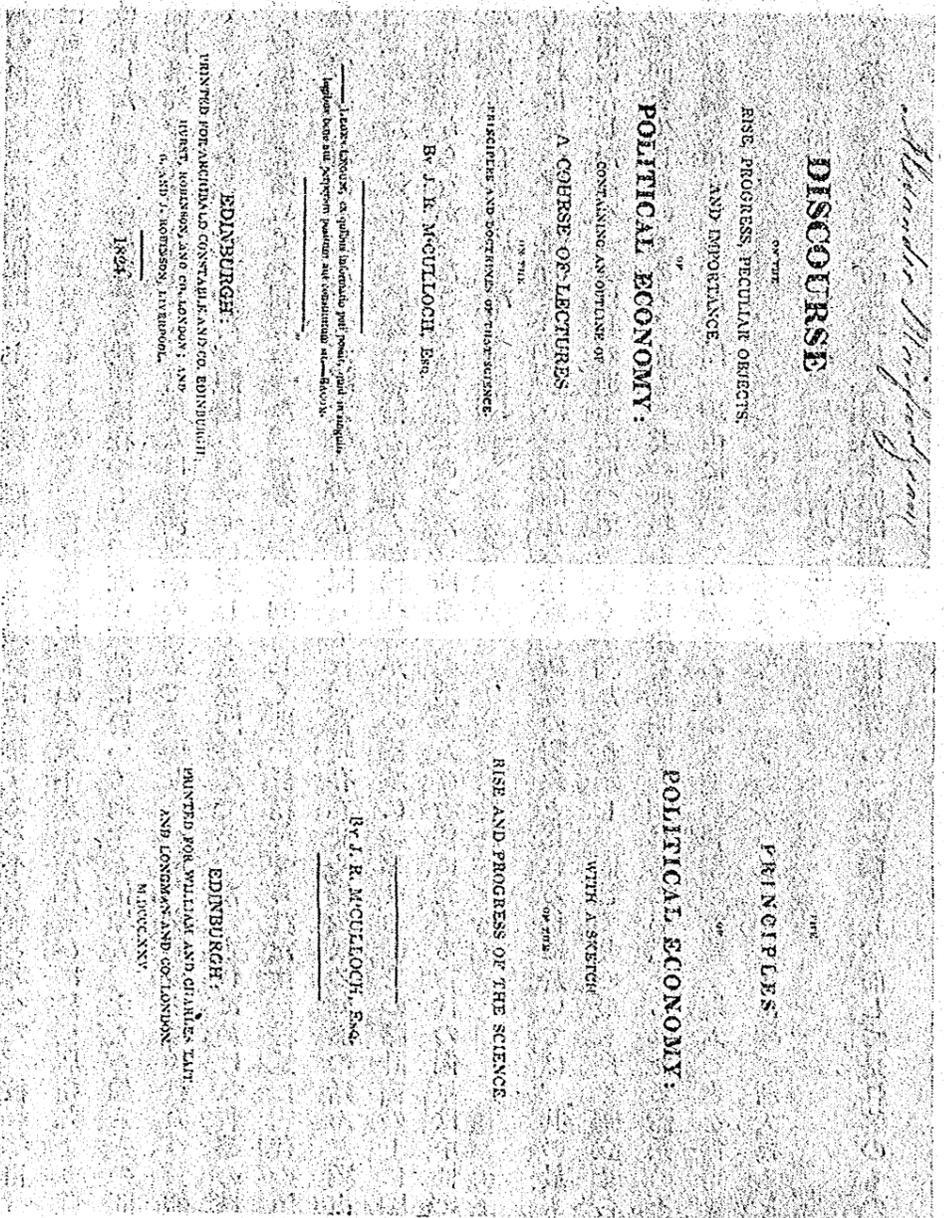
高橋誠一郎

一
ジョン・ラムジイ・マカラック(John Ramsay M'Culloch)の處女出版は、國債利子の引下げが商業階級及び農業階級の窮狀を救済する唯一可能なる方法たることを論證せんとせる『國債利子引下げ論』(An Essay on a Reduction of the Interest of the National Debt, proving that this is the only possible means of Relieving the Distresse of the Commercial and Agricultural Interests; and Establishing the Justice of that measure on the Surest Principles of Political Economy, 1816)である。彼れは其の翌十七年より『蘇國人』(The Scotsman)誌上に引き続きで經濟上の論文を掲載し、十八年にはリカードの『經濟原論』に關する評論を『エジンボロー評論』(The Edinburgh Review)に寄せたるを初めとして長く同誌の爲めに筆を執つた。彼れは又エジンボローに於いて講演を行つて居たが、一千八百二十年には倫敦に出でて經濟學の研究を目的とせる講習會を組織し、二十四年にはリカード記念講演を行つた。彼れは彼れが是れ等兩市に於いて講述せる課程の序講に於いて、經濟學の基礎たる諸原理

の概観、其の種々なる結果を説明するが爲めに提唱せられた最も有名なる諸理論に於ける特異點、之れと政治學との間の差別、社會の總べての身分及び階級に對する其の研究の效用、並びに彼れの講義案を其の學生に示さんことを企圖した。然しながら、甚だしく短少なる時間内に於いて斯くの如く多數の題目に觸るゝことは不可能であつた。是に於いて乎、彼れは一千八百二十四年『經濟學の發生、進歩、特殊目的及び重要性』(A Discourse on the Rise, Progress, Peculiar Objects, and Importance, of Political Economy: containing an outline of A Course of Lectures on the principles and doctrines of that science.)と題する小冊子を公にして、主として其の演習會に出席する者の用に供せんことを期した。(同年十月附同書序文)。此の書は一千八百二十五年に重刻せられ、同年ブルジョア(Guillaume Prevost)の手に佛譯せられた。

彼れに従へば、經濟學の目的は、人間の勤勉が「富」を構成する必需品、快適品及び享樂品を最も能く生産するを得せしめらる可き手段を指摘し、這般の富が相異なる社會階級の間に分配せらるゝ割合、並びにそれが最も有利に消費せらるゝ方法を確知せんとするに在る。(Ibid., p. 1.)。即ち彼れは其の先輩ジェームズ・ミルによつて創始せられたる經濟學四分法を採らずして、依然として三分法を固執するものである。

彼れ曰く、富の領有は個人の生存及び慰安に取り、又、諸國民の文明進歩に取り缺く可らざるものであるに拘らず、其の泉源を探求するが爲めに極めて尠なる努力が行はれたに過ぎず、又經濟學の研究が今に至るも猶ほ包括的なる教育制度の主要部分を形成しつゝあるものと考へらるゝことなきは正さに吾人をして驚異を感じしむ可きである。斯學をして不當に閑却せしめた種々なる事情中に在つて最大なる影響を有せるの觀あるものは、古代の世界に於ける「家内奴隸」の制度と近世の歐洲諸大學に於ける教育案が初めて形成せられたる時期の暗黒とである。希臘



及び羅馬の市民は現代歐洲住民の主要業務を形成する諸職業に従事するを不名譽と考へた。彼れ等自身の盡力によつて自己を富裕ならしむるに努むることなく、彼れ等は奴隸の不承不承の勞働並びに被征服諸邦より強奪せられた補給に依頼した。斯くの如き社會状態に在つては、近代歐洲に於いて地主と借地人、主人と雇人との間に存しつゝある關係は未知であり、隨つて又、古代人は經濟科學の極めて重要な一部分を形成する地代及び賃銀の騰落より生じつゝある興味あり且つ重要な問題の總べてに對して全然門外漢であつた。古代に於ける哲學の精神も亦、經濟學の開發に取つて極めて不利であつた。富者の奢侈的若しくは一層精鍊せられた生活様式は古代の道學者によつて最大なる害悪と看做された。我が諸大學の設立に際しては、當時存在せる僅少なる知識の殆んど獨占的なる領有者は僧侶であつた。彼れ等の特殊の感情と事業とが彼れ等が其の構成に従事せる教育の諸計畫の上に顯著なる影響を有さなければならなかつたことは當然であつた。商業、製造業及び奢侈に對する古代の偏見は中世に於いても尙ほ有力なる影響を有して居つた。(Ibid., pp. 4-8)。

而して彼れに従へば、經濟學が更らに一般的なる注意と研究の對象と爲れる後に於いては、其の最も卓越せる斯道の大家中に存したる不一致は其の進歩に取つて著しく不利なるを示し、而して其の最も良く確立せられたる結論を疑ふの傾向を生じたのである。而も、其の取扱ふ諸現象を説明するが爲めに唱道せられたる體系の異なるが故に經濟學の結論を信ぜざる者は、同一理由に據つて殆んどあらゆる他の科學の結論を疑ふことを得可きである。(Ibid., pp. 8-9)。

吾人は這般の論述に於いてマカラックがジャン・バチイスト・セイに學ぶ所大なるを想はなければならぬ。(昭和四年版拙著「經濟學史」二一〇頁参照)。

經濟學の基礎を形成する諸原理は人間の本原的組織及び自然界の一部を構成し、而して是れ等のものゝ作用は機

械的原理の其れと等しく觀察及び分析の援助によつて探求せらる可きである。然しながら、マカラックは自然科學と倫理及び政治科學との間には重大なる差別の存することを認める。前者の結論は「あらゆる」場合に適合するに反し、後者の其れは惟り「大多數」の場合のみに適合する。富の生産及び蓄積が依存する諸原理は吾人の本性に附隨せるものであり、あらゆる個人の行動の上に有力なる影響を及ぼすものではあるが、而も其の影響は常に「同一」程度ではない。是に於いて乎、理論家は彼れの一般準則を大多數の場合に於ける其の作用を説明するやうに構成するを以つて自ら満足し、個々の場合に適合す可く是れ等のものを變更するの一事は之れを觀察者の明智に委ねなければならぬ。(Ibid., p. 10)。

「公共の利益」は常に經濟學者の注意を専らならしむ可き對象を形成す可きである。彼れは「特殊階級」の富及び享樂を増加するが爲めに體系を構成し、計畫を考案す可きではなくして、「國民的富」及び「一般的繁榮」の源泉並びに是れ等のものが最も生産的ならしめらるゝを得可き方法を發見するに専心す可きである。(Ibid., p. 12)。

經濟科學に於ける根據ある結論に到達するが爲めには、特殊の場合に於ける、若しくは特殊の個人に影響する際に於ける結果を觀察したのでは充分ではない、吾人は更らに是れ等の結果が「不變」であり、且つ「普遍的に適用せられ得る」か如何かを探求しなければならぬ。「劃」且つ「不變」の事實と矛盾する理論は誤謬でなければならぬ、然しながら吾人の平常の經驗と相容ることなく、而して吾人が之れに伴ひつゝある事情を識別するの手段を有することなかる可き際には、特殊の結果の觀察は吾人をして早急に更らに多數の現象を満足に説明する原理を變更し、若しくは拒否せしむ可きでなす。(Ibid., p. 13)。

然しながら、吾人は吾人が知ることなき特殊の事情を有する少數の結果の外觀上の對立に由つて一般に承認せられたる原理を拒否す可きではないが、吾人はそれが極めて範圍廣く且つ丹念なる歸納より演繹せらるゝに非ざれば其の堅實に於いて何等の信をも有することを得な

い。富の生産、分配及び消費を規制しつゝある諸法則の眞知識に到達するが爲めには、經濟學者は極めて廣大なる表面から其の資料を抜き出さなければならぬ。(ibid., p. 17.)。吾人は爰にマカラックが、縦令ひ、セイの『經濟學』第二版の序論によつて示唆を受けたことが明かであるとは云へ、極めて簡單であり、不充分ではあるが、夙にシニョアに先立ち英國に於いて經濟學上の法則及び方法を論述せるの事實を認めなければならぬ。

加之、彼れは其の筆を進めて簡單なる經濟學說史を叙述してゐる。斯くの如きは恐らく、ポボン・ヅ・ヌムール (Dupont de Nemours) が重農主義の主旨を紹介するが爲めに著せる『新興科學の起原及び進歩』(De l'origine et des progrès d'une science nouvelle, 1768.) 並びに前掲セイの『經濟學』序論に暗示を得て起草せられたものであるが、而もそれはブランキヤ (Jerôme Adolphe Blanqui) の Histoire de l'économie politique en Europe, depuis les anciens jusqu'à nos jours, suivie d'une bibliographie raisonnée des principaux ouvrages de l'économie politique, 1838. に先立つ十餘年、トウスマス (Travers Twiss) の View of the Progress of Political Economy in Europe since the Sixteenth Century, 1847. の現る二十餘年の以前であつたことを多としなければならぬ。

彼れは經濟學を以つて極めて新しき起原のものと觀る。著しく優秀なる數多の論篇は先きに其の分離せる部分の或る者に關して現れたのであるが、而も、凡そ第十八世紀の半ばに至るまでは、それは全體として、若しくは科學的方法に於いて論述せらるゝことがなかつた。這般の事情は自から其の後に現れた誤れる體系の多數を辯明するに充分である。科學の殆んどあらゆる部門の最初の開拓者等は個々の事實の比較並びに相異なる諸原理、及び相異なる事情に於ける同一諸原理の作用に伴へる諸現象の周到なる検討から其の一般的結論を導くことなくして、最初先づ頗る狹隘且つ不安固なる基礎の上に其の理論を組み立てたのである。(ibid., p. 20.)。マカラックは先づ、富は專

ら金銀より成ると做すの意見の由來より始めて、重商主義を論じ、次いで、初めて「經濟學の根本原理を探知するの意圖を以つて」富の泉源を研究且つ分析し、斯くて又之れに系統的形態を與へ、而して之れを「科學の地位に昇らしめたフランスワ・ケネー及び佛國經濟學者、即ち重農學派に及び、總がて『經濟靜思錄』(Meditazioni sulla Economia Politica, 1771.) の著者ヴェリ、伯 (Conte Pietro Verri) が、農業に使用せられたる労働の優越せる生産性に關して佛國經濟學者等によつて抱懷せられたる謬見を指摘し、而して勤勉のあらゆる作用は實に既存物質の變形より成ることを立證したる旨を述べ、而して遂に一千七百七十六年アダム・スミスが其の著『國富論』を出版して、ロックの『人間悟性に關する論文』が心意の哲學に對して爲せる所のものを經濟學に對して爲せることを説いてゐる。マカラックは『國富論』の根本的缺陷を以つて、穀物の價值の不變並びに賃銀率に於ける動搖が價格に及ぼす結果に關して提唱せられたる誤れる學說に存するものと觀る。彼れに従へば、是れ等のものは其の著者を妨げて、地代の本質及び原因並びに利潤率を支配する諸法則に關して何等明瞭且つ正確なる總念を取得せしむることなく、斯くて又、其の著の富の分配並びに課税の諸原理を取扱へる總べての部分を毀損したのである。而も尙ほ彼れはスミスを以つて近代的經濟學體系の眞の創始者と做すに躊躇せざる者である。(ibid., pp. 21-57.)。

マカラックはマルサスの『人口論』を以つて『國富論』の出版以後に於いて斯學に對して爲されたる最初の偉大なる貢獻であると認める。マルサスは人口原理の最初の發見者ではないが、而も疑ひもなく、確乎たる基礎の上に之れを打ち建て、而して社會の至要なる利害と關聯せる殆んど總べての大問題、特に、賃銀率及び貧民の狀態の支配的原因に關する其れの正しき理解に對する其の大なる重要性を明かにせる最初の者であつた。マカラックは又、ジャン・バチイスト・セイの『經濟學』が其の明晰にして論理的なる排列並びに其の多くの例證の適切なることによつて經濟

學に與へたる疑問の餘地なき大功績に加へて、正確、獨創且つ深遠なる種々なる論述を以つて斯學を豊富ならしめたることをリカードと共に承認する。是れ等のものの中に在つて「過多」の眞の性質及び原因の説明は明かに最も重要にして且つ價值あるものである。一千八百十七年に於けるリカードの『經濟學及び課税原理』の出現は斯學の歴史に於いて記憶す可き新時代を形成する。リカードは此の書中に於いて諸貨物の交換價値を決定する諸原理を解析し、而して財富分配の學の全景を示した。マカラックはリカードの著作に對して絶大の稱讚を浴せる。リカードの論述の簡約、例證の不足、並びに彼れが其の推論に與へたる數學的性質は斯くの如き研究に不慣れなる讀者をして快く彼れに追隨せしむるを幾分困難ならしむるものがある。甚しくキケロを愛好する辯論術の研究者等は既に彼れ等の技術に於いて妙なからざる進歩を遂げてゐるといふのがキンチリアヌス(Quintilianus, Marcus Fabii)の意見であつた、而して同一の事はよくリカードの諸著を樂む經濟學の研究者に就いても躊躇なく云はれ得るのである。リカードの著作並びに斯學一般の研究は概近の著者の勞作によつて著しく容易ならしめられた。マカラックは先づマーセット夫人によつて行はれたる經濟學通俗化の業績を稱揚せる後、ジェームズ・ミルの『經濟學根本義』に説き及び、彼れの目的は單に經濟學諸原理の嚴密に論理的なる推斷を示さんとするに存したるが故に、彼れは過去若しくは現在の事情又は制度の孰れに照しても其の理論を例證せんと企圖することがなかつたが爲めに、彼れの著作は二般的に興味を與ふることが少ないかも知らぬが、而も夫れだけ既に斯學の大眞理を具さに研究せる者の胸中には是れ等眞理の關係を定置するに適するものであると做してゐる。(Ibid., pp. 57-71)。而してマカラック其の人は「嘗だにリカードのみならず、ジェームズ・ミルをも亦、通俗化する」を以つて其の使命と做せるものとも稱するを得可きである。(Theorien über den Mehrwert, aus dem nachgelassenen Manuskript "Zur Kritik der

politischen Ökonomie" von Karl Marx herausgegeben von Karl Kautsky, Dritter Band, 4. Aufl., 1921, S. 201.)

マカラックは次いで經濟學と政治學及び統計學との間の差別を述べる。彼れの見る所を以つてすれば、富の生産及び分配を規制する諸法則はあらゆる國及び社會階段に於いて同一である。共和國に於ける富及び人口の増加に取つて有利、若しくは不利なる事情は君主國に於いても等しく存し、又精確に同一の影響を有す可きである。之れ無くんば何等堅實且つ不斷の盡力存すること能はざる財産の安固、人間の種々なる才能及び機略を活動せしむるが爲めに極めて必要なる、勤勉のあらゆる相異なる部門に従事するの自由、並びに國富の蓄積に資すること大なる公經費に於ける經濟は或る一定特種政體獨特の屬性ではない。自由なる國家が概して富と人口とに於いて最も急速なる増進を爲すは、其の政治組織の直接の結果たるよりも間接の結果である。そは人民のより大なる部分が政治上の權利及び特權を行使することを許さるゝ單なる事情よりも、財産權が神聖視せられ、勤勉の自由が拘束せられ制限せらるゝこと少なく、又、公所得が庶民政治の下に於いてより賢明に徴收せられ支出せらる可きより大なる蓋然性より生ずる所多きものである。(Ibid., pp. 72-73)。マカラックは實に經濟理論の普遍性及び恒久性を信すること最も大なるものであつた。

彼れに従へば、政治家は政府の基礎たる原理を検討し、至高の權力が何人の手中に最も有利に置かれ得るかを決せんことを努め、而して社會の支配的並びに被支配的部分の相互的義務及び責任を明示する。經濟學者は斯くの如く高く飛翔するものではなくして、彼れが判斷を下すことを求めらるゝものは政府の組織に關するものではなく、單に其の行動に關するものである。(Ibid., p. 74)。彼れは又統計學と經濟學との區別を述べて曰く、統計家の目

的は特殊の時期に於ける特殊の國家の状態を叙述するに存するも、經濟學者の目的は之れをして斯くの如き状態に導ける原因、並びに其の富が無限に増加せられ得る手段を發見するに存すると。經濟學者は統計家の精査によつて供給せられたる事實を取り容れ、而して是れ等のものを歴史家及び旅行家によつて供給せられたる所のものと比較せる後、是れ等のもの、關係を發見するに努める。堅忍なる歸納によつて、——特殊原理の作用に伴へる諸事情を周到に觀察するによつて、彼れは是れ等のものが眞に生ぜしむる諸結果並びに那邊まで是れ等のものが他の原理の作用によつて變更せらるゝの傾きあるかを發見する。斯くて地代と利潤との間——利潤と賃銀との間の關係並びに社會に於けるあらゆる相異なる階級の一見衝突しつゝあるの觀あるも、事實上調和的なる利害を規制し且つ連結する種々なる一般法則は發見せられ、而して總べての確實なる論據を以つて樹立せられたのである。(Ibid., pp. 75-76)。マカラック自身は一面に於いて統計學者であつて、彼れは一千八百三十二年、其の二十年間の調査の結果を包蓄せる其の統計的述作 *A Dictionary, Practical, Theoretical, and Historical, of Commerce and Commercial Navigation*. を公にし、同三十七年には幾多専門家の援助を得て *A Statistical Account of the British Empire*. を出したのであるが、而も其の統計的歸納的研究は遂に彼れをして普遍主義及び永久主義の誤謬から免れしむることを得なかつた。マルクスを以つて言はしむれば、彼れの統計的諸著は純然たる *Geldschneiderei* であつた。(Theorien, a. a. O., S. 206)。而して彼れは經濟學の研究が嘗だに立法者及び上層資産階級のみならず、中層及び下層社會の人々に取つても有用なる所以を論述するに於いて極めて雄辯であつた。(A Discourse, op. cit., pp. 76-86)。彼れは、英國が經濟學の郷土であるに拘らず、之れをして通俗教育の一部門たらしむるの利益を知覺し、而して這般の目的の爲めに施設を行へる最初のものたるの誇りを有すること能はざる旨を述べ、斯くの如き名譽を與へら

る可きものは、一千七百五十四年、ナポリ政府に申請して同大學に於いて三百スカッピの俸給の附隨せる經濟學の講座を新設せしめ、其の友人ジェーノヴェーシイ(Antonio Genovesi)をして最初の教授たらしめ、同年十一月五日を以つて開講するに至らしめたる、伊太利亞フィレンツェの人インテリイ(Bartolomeo Intieri)であると做し、次いで一千七百六十四年女帝マリア・テレジアはミラノ大學に於いて同一の講座を設け、マッカリア侯(Marchese de Beccaria)を其の初代の教授に任命したのであるが、専制政府に服従せしめられ、出版の自由を剝奪せられた國々に於いては、經濟學に關する講義が何等顯著なる貢獻を爲すことを得ざりし旨を述べ、而も斯學の研究が露西亞に於いて皇帝アレクサンデル一世によつて多大なる獎勵を受け、ストルヒ(Heinrich Friedrich von Storch)が皇帝の所望によつて大公ニコライ(後の皇帝)及びミハイルの爲めに講義の課程を作成し、一千八百十五年に *Cours d'Economie Politique, ou exposition des principes qui determinant la prospérité des nations*. 六卷を彼得堡に於いて出版せることを記してゐる。(A Discourse, pp. 86-89)。然るに専制君主等が此の公民生活の主要科學の原理に於いて其の臣民を教育するが爲めに教授を任命したるに反し、そは英國に於いては無知、利害關係、權威及び時流の僻見に抗して何等公の庇護なくして奮闘するに委せられて來たのである。然も經濟學が今後甚しく長く斯くの如く不當なる閑却を蒙るが如きことあらざる可しと思惟する充分なる理由が存する。斯學の原理に精通せりと想像せらるゝ政治家が議會に於いて又、地方に於いて勢力を得たことは最も悦ばしき一の事情であり、リカード記念經濟學講座(the Ricardo Lecture on Political Economy)の設置は其の進歩を促進するに資するものと期待せられ得る他の事情である。(Ibid., pp. 89-91)。而して此の講座こそ實に彼れが一千八百二十四年に擔任せるものであつた。

次いでマカラックは自己の講義の要旨に就いて述べる。(Ibid., pp. 93-109.)。斯學の根本原理を最も明瞭にして最も顯著なる見地に置き、其の種々なる部分の密接なる相互依存を明かにし、而して其の一層重要なる實際的適用を指摘するは彼れの主要目的であつた。(Ibid., pp. 110-111.)。

二

マカラックは其の講義の資料を擴張して一千八百二十三年、『大英百科全書補遺』(Supplement to the Encyclopaedia Britannica)の爲めに『經濟學』の一項を草した。此の項目がトーマス・ロバート・マルサスによつて『毎季評論』誌上に於いて深刻なる批評を受けたことは吾人が他の機會に於いて述べたるが如くである。(『三田學會雜誌』第二十九卷第一號所載拙稿「トーマス・ロバート・マルサスと彼れの所謂經濟學上の新學派」二十二頁以下参照。)彼れは更らに此の項目を基礎として、一千八百二十五年其の『經濟原論』(The Principles of Political Economy: with a sketch of the rise and progress of the science.)を公にした。(同年十一月附同書序文参照。)而して彼れは前年の著 A Discourse の大部分をして新著の第一部を形成せしめた。(新著七頁より六十頁に互れる部分並びに其の附録四百十九頁より四百二十三頁に互れるものは舊著一頁より七十六頁に至る部分並びに其の附録百十三頁より百十七頁に互れるものも再録である。而して舊著は附録を加へて僅々百十八頁の小著なるが故に、其の大部分は新著中に収録せられたのである。而も尙ほ著者は其の表題頁の對面に舊著の廣告を掲げて新著の購讀者をして更らに舊著をも購讀せしめんとしつゝあるの觀がある——『エジンボロー評論』に於ける彼れの反復辯はエジンボローの倫理哲學教授 ジョーン・ウィルソン (John Wilson クリストフマー・ノース Christopher North) の (p. Some Illustrations of Mr. McCulloch's Principles of Political Economy, by Mordecai Mulhon, 1826. 中) 諸語を以りて指摘せられてゐる)。

此の書は惟り英國民のみならず、他の歐洲諸國民の間にも廣く行はれて、著者の目的とせる經濟學通俗化の事業を遂行し、一千八百三十年には第二版を、四十三年には第三版を、四十九年には第四版を、六十四年には第五版を出し、其の死去(一千八百六十四年十一月十一日)の後に於いても其の賣行き絶えずして、七十年にはジョン・ロッキの Essay on Interest and Value of Money. を附せる普及版を出し、更らに七十八年、八十五、六年にも重版せられ、プランシエ(A. Poinché)の佛譯は五十一年に發兌せられて、六十四年に再版を見、ヴェーバー(G. M. v. Weber)の獨譯は三十一年に公にせられた。

マカラックは洵にリカード才學徒であり、古典學派の亞流であつて、決して獨創的思想家ではなかつた。彼れは經濟學が其の定義に於いて、其の法則に於いて、又其の實際的適用に於いて完全なるものと信じ、其の普及を助け、之れに準據せる有用なる立法を促進せんとした。既にリカード才經濟學はトゥーク(Thomas Tooke)によつて起草せられ、ベーリング(Alexander Baring)によつて一千八百二十年五月八日に下院に提出せられたる倫敦商人の自由貿易の請願によつて支持せられ、内閣をも動かすに至つて居つた。ハスキソン(William Huskisson)はカニンズに支持せられて農産物に對するものを除き、漸次總へての保護關稅を撤回した。(John Stuart Mill, Autobiography, 1873, p. 99.)。而して穀法も亦、一千八百四十六年に至り、當年の彼れの關係サー・ロバート・ピールによつて撤廢せらる可き運命を有して居つた。マカラックを以つて觀れば、苟も商業に關する初歩の學說を學べる者は、あらゆる他の貨物と等しく穀物をして其の最小の價格を以つて取得せられ得る何れの場所に於いても購入せらるゝに委するに由つて國富は一層有效に増進せらる可きことを言明するを躊躇するを得ないのである。(A Discourse, op. cit., p. 79.)。

マカラックは其の『原論』に於いて、經濟學に於ける生産を以つて物質の生産(そは神の專屬物である)を意味することなく、既存物質をして吾人の欲望を満足し、吾人の享樂に資するに適せしむるやうに之れを領有し、變更するに由る「效用」の生産、従つて又、交換價値の生産と解釋し、而して斯くの如く使用せられたる労働を以つて富の唯一の泉源と做した。(Principles, op. cit., p. 61.)。彼れは労働の生産力を増加する手段を以つて、第一、財産の安全、即ちあらゆる個人の胸中に於ける、彼れが其の労働の收果を任意に處置するを許さる可しと做す鮮明にして根據ある確信、第二、交換若しくは物々交易の導入及び其の結果たる特殊業務に對する特殊個人の充當、並びに第三、曩時の労働の所産、若しくは更らに普通の名辭を以つてすれば、資本の蓄積及び使用、第四、相異なる地方の間に於ける業務の分割、即ちトールレンズ大佐の命名に係る「地域的分勞」に基ける同一國內の諸地方及び諸國の間に行はるゝ商業であると做した。彼れは商業の自由が制限せられざる時は、各國は必然各々に取つて最も有利なる業務に盡瘁するものと觀た。(Ibid., pp. 73-138.)。彼れは貨幣を以つて物々交易の困難を免れんとするの努力によつて發生するものと觀るの通説に従つた。(Ibid., pp. 138-139.)。彼れは最大なる利潤を生ずる業務を以つて最も有利なるものと觀じ、農業に使用せられたる資本が他に比して大なる「公」の利益を生ずると做すミス、マルサス等の意見を排斥した。(Ibid., pp. 143-144.)。

彼れは機械の進歩を以つて、其の結果に於いて、労働者の熟練及び技巧の進歩に等しきものと觀、而して貨物の價格を低下し其の供給を増加するの傾向を有する機械の導入は能く労働に對する需要を減少し、若しくは賃銀率を低下するを得ざるものであると論じた。一業務に於ける斯くの如き機械の導入は必然解除せられたる労働者等に對して或る他の業務に於いて同一若しくは更らに大なる需要を生ず可きである。リカードは機械が貨物の費用を低

下するの目的を以つて導入せられずして、そが其の所有主に同一の純利潤を與ふるか、若しくは彼れが労働の使用より取得するよりも兎に角極めて僅かに多くの純利潤を與ふるが故に導入せらるゝことあり得可く、斯くの如き場合には、機械導入直接の結果が労働者に取つて最も有害である可きことは何等の疑問も存し得ざる所であると想像した。(Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, 3rd ed., 1821, pp. 466 ff.)。而もマカラックは這般の場合には可能ではあるが、然しながら、斯くの如きは是れ迄に實際に生じたること會つてなく、將來生ず可き見込も極めて少ないことを安んじて斷言することが出來ると思惟した。(McCulloch, Principles, p. 187.)。

彼れはセイ及びミルに従つて、總べての種類の貨物の「一般的過多を以つて不可能である」と觀た。「種類に於けるあらゆる過剩は或る他のものに於ける等しき不足によつての償はれなければならぬ。あらゆる場合に於いて、過多の特殊原因たるものは、生産力の増加に非ずして、其の誤れる適用、目的に對する手段の不適當なる適用である。而して、彼れは斯くの如き禍害に對する眞個唯一の有効なる救済が産業の完全なる自由に於いて、又、商業政策の寛大にして擴張せられたる制度の確立に於いて看出せる可きことが明かであると考へた。(Ibid., pp. 190-191.)。而して彼れは這般の原則の確立は全く前記諸學者の力に依るものであるが、而もそは副監督タッカー(Josiah Tucker)によつて其の一千七百五十二年に公にせられたる小冊子に於いて指摘せられ、(Reflections on the Expediency of a Law for the Naturalization of Foreign Protestants, Part II, p. 13.)。而して一千七百九十五年に出版せられた短論篇中に於いて極めて明瞭に叙述せられたと稱してゐる。(Sketch of the Advance and Decline of Nations, p. 82.)。(McCulloch, Principles, pp. 192-193.)。而して彼れは其の『經濟學文献』(The Literature of Political Economy: A Classified Catalogue of select publications in the different departments of that science, with historical,

critical, and biographical notices, 1845.) に於ては、更らに是れ等のものにマン・マンチ (Francesco Mengotti) の『マルクス主義論』(Il Colbertismo, dissertazione, 1792.) を加へらる。(ibid., p. 31.) (Literature, p. 21.) 彼れは又、マルサスに従つて、人爲の方策によつて生ぜしめられ、之れに相應する生存手段の増加によつて先立たるゝか若しくは隨伴せらるゝことのない人民の數に於けるあらゆる増加は單に不幸若しくは死亡率の増加を生ずるに過ぎざるものであることを説いた。(Principles, p. 194.)

三

マカラックはジェームズ・ミルに倣つて「交換論」を經濟原論の一部門と看做すことなく、セイの先蹤に従つて「分配論」の最初の部分を價值及び價格論に充てる。彼れは一貨物の價值を以つて、二重の見地に於いて考察せられ得るものと思惟した。第一は其の有する労働の一定量若しくは惟り労働に由つてのみ取得し得る他の貨物の一定量と交換せられ、若しくは之れを購入する能力に對する關係に於ける「交換價值」若しくは「相對的價值」であり、第二は其の領有若しくは生産に費されたる労働量若しくは考查の行はるゝ時期に於いて斯くの如き目的の爲めに要求せらる可き労働量に對する關係に於ける「眞實價值」である。彼れを以つて觀れば、交換價值を有する總べての貨物は又、眞實價值を有せざるを得ざるものであり、而して眞實價值を有する總べての貨物は又、交換價值を有せざるを得ざるものである。(ibid., p. 211.) 而して何等の獨占も存せざる時、又、市場に於ける貨物の供給が正確に有效なる需要と相應せしめらるゝ時には、是れ等のものゝ交換價值は其の眞實價值と同一である。(ibid., p. 215.) 而して是れ等のものが同一であるならば、彼れの所謂兩労働量は又同一でなければならぬ。一定量の労働によつて生産せらるゝ貨物は、茲に想定せられたる市場の状態に於いては、同一量の労働によつて生産せらるゝあらゆる他の貨物

と一樣に交換せられ、若しくは之れを購入す可きである。然しながら、彼れ曰く、それは斷じて之れを生産したると正確に同一量の労働と交換せられ、若しくは之れを購入せずして、事實に於いて、それは常により多くと交換せらる可きである、而して利潤を構成するは這般の超過である。如何なる資本家と雖も、既に遂行せられたる一定量の労働の所産を遂行せらる可き労働の同一量の所産と交換す可き意志を有すること能はざる可きである。斯くの如きは貸金に對して何等の利子をも受くることなくして貸與するに外ならざる可きである。(ibid., pp. 221-222.) マルクスは茲にマカラックが鐵面皮にもリカードオからマルサスへ逃避したものと做してゐる。(Theorien über den Mehrwert, a. a. O., S. 205.)

マカラックは「生産費」が交換價值及び價格の唯一の規制的原理たることを示した後、這般の費用中に入り、又之れを構成する諸要素を研究する。彼れはアダム・スミスを引用して、労働者以外に何等の階級も存せざる際には、労働の總べての収益は明かに彼れ等に屬さなければならぬ、而して各個人が貨物を生産するに當つて拂ふ犠牲、若しくは彼れが是れ等のものゝ上に費す労働量は其の交換價值が其の際に決定せられ得る唯一の原理であることが普く認められると説き、(McCulloch, Principles, p. 264.) 次いで地代が土地に對して支拂はれ、流動及び固定資本が勞作者の労働を容易ならしむるが爲めに使用せらるゝ際に於ける貨物の交換價值を決定する諸事情を探求する。彼れは、貨物の眞實價值が其の生産に取つて必要とせらるゝ労働量によつて規制せられ、若しくは決定せらるゝと做すの原理は地代の支拂によつて影響せらるゝことがないと考へた。(ibid., p. 287.) 然らば、貨物の價值に及ぼす資本の蓄積及び使用並びに貸銀率に於ける變化の影響如何。彼れの意見に據れば、資本は人間を支持するか、若しくは生産を容易ならしむるが爲めに直接に役立たしめられ得る、人間の勤勉によつて生産せられたる總べての

貨物若しくは物品に對する別名に過ぎざるものである。それは實に「以前の労働」の蓄積せられたる所産以上の何物でもない、而してそれが貨物の生産に使用せらるゝ時、是れ等のものゝ價值は明白に惟り直接労働の定量のみに依らずして、必然其の生産に使費せられた直接労働と等しく蓄積労働、即ち資本の全量に依つて規制せられなければならない。是に於いて乎、資本は曩時の労働の蓄積せられたる所産に外ならざるが故に、其の使用は諸貨物の交換價值をして其の生産に要せらるゝ労働量に依頼せしむるの原理に影響を及ぼすこと能はざるの觀がある。(Ibid., p. 288.)。總べての部類の資本家が正確に同一時期に於いて返還せられ得可き、即ち同一程度の持続性を有する固定資本若しくは流動資本の孰れかを使用するとしたならば、彼れ等は總べて全然同一の地位に存す可く、而して等しく貨銀の騰落によつて影響せらる可きである。然しながら、斯くの如き事情の下に在つては、貨銀の騰落は明かに貨物の相對的價值若しくは價格に於ける如何なる變化をも生ぜしむることを得ざるものである。貨銀率に於ける動搖は一部門に限らるゝを得ない。競争は常に或る一業務に於ける其の率を他のものゝ共通の水準に押上げ若しくは押下ぐ可きである。(Ibid., pp. 292-293.)。

次いでマカラックはリカードオに従つて、諸貨物の生産に使用せられたる資本が同一程度の持続性を有するものに非ざる場合に、是れ等のものゝ價值に及ぼす貨銀率に於ける動搖の影響を發見せんとする。而して彼れは貨銀が騰貴する時は、標準と看做さるゝ貨物を生産するものよりも持続性少なき資本によつて生産せらるゝ總べての貨物は交換價值に於いて騰貴す可く、而して持続性大なる資本によつて生産せらるゝものゝ總べては下落す可く、又貨銀が引き下げらるゝ場合には反對なる可きであると論結する。(Ibid., p. 309.)。斯くて貨銀率に於ける變化が「價格」の上に有する影響は主として金若しくは銀の生産に使用せらるゝ資本の本質に依存す可きことが明白である。縱令

ひ、貨幣素材の生産に使用せらるゝ固定資本及び貨銀の支拂ひに充當せらるゝ流動資本の割合が如何にあるも、より大なる定量の流動資本の媒介により、又より少なる固定資本若しくは機械を以つて生産せらるゝ貨物の總べては貨銀が騰貴する時は騰貴し、又貨銀が下落する時は下落す可きである、而もより少量の流動資本の媒介により、又より多くの固定資本若しくは機械を以つて生産せらるゝものは貨銀が騰貴する時には下落し、貨銀が下落する時には騰貴す可きである、然るに貨幣と殆んど等しき事情に於いて、即ち之れと等しき流動資本及び固定資本の定量の媒介によつて生産せらるゝものは斯くの如き動搖によつて影響せらるゝことがないであらう。而もマカラックは貨銀率に於ける變化によつて生ぜしめらるゝ大多數の貨物の交換價值に於ける變化は比較的狭小なる限界内に限らるゝものと觀る。(Ibid., p. 311.)。而して又、貨銀率に於ける動搖は特殊貨物の交換價值に於ける一定の變化を生ぜしむ可きではあるが、而もそれは貨物の全集團の「全部價值」に對して加減を行ふことがない。(Ibid., p. 312.)。這般の動搖が最も持続性少なき資本によつて生産せらるゝものゝ價值を増加するならば、それは更らに持続性大なる資本によつて生産せらるゝものゝ價值を等しく減少する。斯くて是れ等のものゝ總價值は常に依然として同一である。而して特殊の貨物に就いては、其の交換價值が直接に其の「眞實」價值、即ち之れを生産し、之れを市場に致すに要せらるゝ労働量に等しいと云ふことは正確に眞ではないが、一團と看做されたる貨物に就いては之れを是認して大體に於いて誤りなきものである。マカラックは彼れが茲に表明し説明せんと努めた原理が本質上リカードオによつて唱道せられたものと同一であると思惟した。然るにリカードオは諸貨物が購入せられ若しくは生産せられた後、是れ等のものが使用せらるゝに適することゝ爲るまで、之れを保存するによつて往々是れ等のものに對して與へらるゝ附加的交換價值が労働の結果と看做さる可きに非ずして、其の貨物に投費せられたる資本が實際に使用せられ

たとゆるならば生ず可かりし利潤に對する等價物として考察せらる可きものであることを承認する限りに於いて、貨物の交換價值は其の生産に要せらるゝ労働量に依存すると云ふ彼の大原理を變更せんとしたのである。然しながらマカラックは斯くの如き例外を設く可き何等有力なる理由をも認めざるものである。(Ibid., p. 313.)。而してリカードが夙にマカラックの窮屈なる労働價值説を戒めて居つたことは吾人が會つて述べたるが如くである。昭和四年版拙著『經濟學史』一九六一八頁參照)。而してマカラックは此の原理の適用によつて、綿工業に關するが如き場合には高賃銀率は一國の貿易をして何等不利なる事情の下に置くものに非ずと論結する。(Ibid., pp. 320-325.)。次いでマカラックは普通の労働に對して支拂はるゝ賃銀率を規制する原則を發見せんと努める。(『社會經濟史學』第一卷第四號所載拙稿『賃銀學說史上の生存費說、賃銀基金說及び收益說』一七一—一九頁參照)。恐らく彼は最も嚴重、無制限なる賃銀基金説を表明せるものであらう。彼は翌二十六年 An Essay on the Circumstances which determine the Rate of Wages and the Condition of the Labouring Classes. を公し、更に其の改題版 A Treatise on the Circumstances which determine the Rate of Wages and the Condition of the Labouring Classes. を五十一年に出版して、同じく斯學説を主張してゐる。(前掲拙稿一九一〇頁參照)。次いでマカラックは地代を控除せられた「勤勉の全收益」が労働者と資本家との間に分割せらるゝ割合を決定する事情に就いて述べ、リカードの利潤理論が如何なる意味に於いて眞なるかを考察し、資本の蓄積は利潤低下の「原因に非ずと做し、土壤の沃度遞減を以つて實に利潤低下の重大且つ唯一の必要原因であると觀る。(Principles, pp. 363-381.)。彼は最後に「富の消費」を論ずる。彼は消費を以つて物質の消費若しくは絶滅を意味することなく、單に貨物をして有用且つ願はしきものたらしむる性質の消費若しくは絶滅と解する。消費は總べての人的勤勉の大目的であ

る。(Ibid., p. 390.)。彼は有利若しくは不利なる消費、更に普通の語を以つてすれば、生産的及び不生産的消費の間の分境線を論じ、總べての消費は、それが直接なると間接なるとを問はず、等しく有價値なる産物の同一量若しくは更らに大なる量の生産を惹起するならば生産的であり、斯くの如き効果を有することがないとしたならば不生産的と考へらるゝを得可きものであると做した。(Ibid., p. 391.)。彼は更らに奢侈禁止法の有害なる作用を論じ、(Ibid., pp. 393-396.)、奢侈財に對する嗜好の利益を述べ、(Ibid., pp. 396-403.)、生産的及び不生産的消費に關してアダム・スミスの設けたる標準を批評し、(Ibid., pp. 403-414.)、最後に政府の消費に就いて一言し、經濟及び節儉は私的地位に於いては徳であるが、公的地位に於いては國民的幸福に對する其の影響は頗る大であつて、是れ等のものは惟り第一の徳たるのみならず、最も緊切なる義務であると説いてゐる。(Ibid., p. 416.)。彼は個人の労働及び貯蓄は同時に國民的富裕と公の繁榮の泉源であり、手段であると觀る。是れ等のものは總べての植物界に元氣を與へて成熟せしむる露の雫に比較せらるゝを得可きである。其の孰れのものとも雖も單獨では何等認め得可き影響をも有することがないが、吾人は夏の簇葉と秋の果實とを其の結合作用に負ふのである。(Ibid., p. 418.)。マカラックの論調は飽く迄も個人主義的であり、自由主義的であつた。彼れの大膽なる獨斷論は、イングラムの言ふが如く屢々人をして嫌惡の念を起さしめ、反感を抱かしむるものがある。彼れ自身も、其の晩年に於いては、彼れが新奇なる意見を好むこと餘りに甚しく、不當の熱意と執拗とを以つて之れを擁護せることを認めて居つた。(John Kells Ingram, A History of Political Economy, 2nd ed., 1907, p. 138.)。「彼れは全然獨創を缺き、且つ何等哲學的高貴と雄渾とを示すことがなかつた」ことは事實であるが、而も彼れが經濟學通俗化の時代に於ける明星の一人であつたことは何人も否定することの出來ぬ事實である。マルクスはマカラックを以つて、唯だ單にリカー

ドオの經濟學を以つて營業せんとせる男に過ぎずと稱してゐる。(Theorien, a. a. O., S. 206.)。遮莫、リカード
 オはマカラックが自己の有することのない幾多の長所を有することを知つてゐた。彼れは彼れ自身を理解すること
 のない者が明かにマカラックを理解す可きことを認めて、大多數の讀者によつて容易に理解せらるゝが如き通俗的
 の手法を以つて記されたる經濟學の全體系を起草せんことを彼れに勸告した。(Letters of David Ricardo to John
 Ramsay, McCulloch, 1816-1823, ed. by J. H. Hollander, 1895, p. 25, Letter, April 7, 1819.)。マカラックの
 『原論』は實に此の偉大なる知己の希望を其の死後二年にして實現せるものと稱せらるゝを得可きである。

前號 (第三十卷) 目次

- ヘンリー・ムーアの具體的動的
均衡の理論體系に就て 寺尾 琢磨
- 中世基督教會と婚姻 打村 鑽三
——古代中世に於ける自然法理とその實證法的適用——
- 古版經濟書解題 高橋誠一郎
ルイス・ロバート著 一千六百四十一年版『外國貿易論』
- 天保八年の圍穀令について 野村兼太郎
(社會經濟史資料紹介)
- マルシイ著『集産主義の建設者コンスタン
タン・ペクール』を讀む 平井 新
- 技術の進歩と失業 藤林 敬三
——W. Woytinsky; Drei Ursachen der
Arbeitslosigkeit, 1935——
- 田村浩著 財産進化論 加田 哲二

●一冊定價金五拾錢 郵税金壹錢五厘
●半年分金貳圓九拾錢
●一年分金五圓四拾錢 郵 稅 共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

●營業に關する用件は發賣元宛

●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十一年七月三十一日印刷納本 每月一回一日發行
昭和十一年八月一日發行

三田學會雜誌 第三十三卷 編輯者 江田 範 保
發行所 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
印刷者 金子 鐵 五 郎
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
金子 活 版 所

發賣元 東京市芝區三田二丁目一番地
丸善株式會社三田出張所
電話三田(45) 一九二六番
振替口座東京 二一八五二番

發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會
振替 慶應義塾 芝區三田二丁目二番地
口座 慶應義塾 東京一八二〇四番